

# 東京医科大学差別入試と 女性医師・日本医科大

吉田忠義

はじめに

私は、日本医科大学千葉北総病院に五回も入院を繰返し、余命は少ない。

小学一年生で長岡空襲に遭い家も学校も焼け、二部授業という変則の形をうけ、生涯にわたり損害を被った。貴誌が、平和・民主教育に尽力されていることに準会員として長年励まされている。

昨年暮れまで熊本と大分の太陽光発電所の現場に二年間働いた。多くの問題を見つけたが、報告するには守秘義務に縛られている。専門外の問題だが故郷出身の長谷川泰と日本医科大学にも触れて標題のことに少しあたってみたい。

一 東京医科大の足切り・

下駄はかせ入試と裏口入学

文科省の官僚が、自分の息子の裏口入学の見返りに職権を使って東京医科大を有利に処遇したことが白日の下になり、その官僚は逮捕され大学の理事長と学長が辞任したのは、今年（二〇一八年）の七月である。それに関連して同大学の入学試験の不正が、明るみに出た。文科省は、医学系のすべての八一学校に入試の差別の有無を問い合わせ、現在、東京医科大と昭和大学の二校だけが、問題ありと認めている。

東京医科大のやり方は、女性と浪人生は減点し、男性は加算するというものだった。同大医学科の受験者

は、三五三五人、合格者二一四人、倍率一六倍強（18年度）という人気の難関校である。今年の裏口入学は六人で女子の八二人が操作がなければ合格なのに四三人に減らされた。

同大学は、十一月中旬、過去二年間、操作がなければ入学許可された百一人に対して説明会を開いた。六人だけが最大の受け入れ可能という態度を大学は固執した（朝日新聞17日付）。すでに他校に在学や浪人中の人など不利益を受けた補償は言及していないという。けつきよく、受験生たちにしわ寄せがいつている。受験期が近づき問題はさらに深刻になっている。

## 二 近代化のなか女性医師養成

医術開業試験に合格すれば、医師になれたのが明治初期だった。それに合格するための予備校は、長谷川泰が経営した私立東京医学校、済生学舎だった。長谷川は長岡藩医に二人扶持で河井継之助に雇われ、彼の最期をみとった。帝国議会が開設されるや新潟選出の衆議院議員に当選し、京都に帝国大学を創立するのに尽力した。

長谷川は、一八八四（明治一七）年末に初めて女子

の入学を許可した。それから十七年余の間に百三十人の女性医師が誕生した。済生学舎は、一八七六（明治九）年に開設から一九〇三（明治三六）年八月末、廃校になるまでの二八年間に二万五千人余の学生が医学を学び、九千から一万人の医師を養成した。野口英世も吉岡弥生もここで学び医師になった。原則六期三年で医師免許取得すれば即卒業という仕組みだった。東京女子医科大学の前身を創立した吉岡弥生は、済生学舎が廃校になると自己の医院内に日本最初の女性医師養成機関を作った。それが、東京女医学校であり、一九一二（明治四五）年に専門学校に認定され、戦後の学制改革で東京女子医科大学になった。

GHQの男女共学への指導を拒み女子医大を固守した。男女共学を受け入れた大阪女子医科専門学校は関西医科大学に、帝国女子医科専門学校は、東邦大学医学部になり、男性が主流を占めることになった。戦前戦中の男女不平等を引きずったその時代は、当然の成り行きだった。

吉岡のもとでの最初の卒業生が竹内茂代だが、一九〇八（明治四一）年、その卒業式は四時間も費やした。多くの来賓が祝辞でなく女性医師不要論を述べ、議論

になった所為であり、大隈重信が「一〇年、一五年先を見ようではないか」と漸くおさめたと当時の記録にある。一九六〇年代の「女子大亡国論」の先駆を思わせる。

### 三 日本の女性医師の割合

日本の女性医師の比率は、二〇・三%とOACD関連国で最低である（厚生労働省調査資料以下同）。トップは、ラトビア三国、七〇%台。下から六番目のオーストラリアでも四〇・〇%で、韓国も日本の上である。韓国は男尊女卑の儒教を重視する国柄だが、それよりも低い。

三五歳未満の女性医師の割合をG7諸国と比較すると日本は一九九六年の二〇%台から二〇一〇年は三三・七%、一二年は三三・六%、一四年は三三・五%と横這い。イタリヤやフランスは六五%台である。したがって女性医師を増やすのが、とるべき施策である。なぜならこれからの医療は父性ともども母性がいつそう意思を確認することが重要になると見られるからである。AI技術発達がそれを促進する。

これは、日本小児学会トップの高橋孝雄（慶應義塾

大学教授）の見解で、最近NHKラジオ「明日への言葉」で聴いた。これからの医師は、コミュニケーション力等が特に求められ、女性のやさしい思いやりの特性が最適という。

同氏の最近の著書『小児科医のぼくが伝えたいわたしの最高の子育て』は読んでみたい。

### 四 済生学舎の廃校と日本医科大学、

済生学舎は、貧しい人々は無料でも診てやるという医師を目指し「済生救民」「克己殉公」を建学の精神にした。長谷川泰が経営してきたが、山県有朋がその地位を使いそれを廃校に追い込んだ。当時、長谷川は明治政府の医療行政の中枢にいた。戊辰戦争で長岡藩に二カ月半も抵抗された会津越後口攻めの参謀だった山県はそれを根に持つて長谷川泰を嫌った。

医学史の研究者、唐沢信安（日本医科大学）によると両者が犬猿の仲だったことは周知だが、その背景に東京帝国大学派閥と医術開業試験合格の医師などとの対立があり、医師法や医薬分業などの問題で政治上の争いだった。

一九〇三（明治三六）年、専門学校令（勅令）の施



行で済生学会は、その要件に合わないとなり、夏休み中の八月末日に廃校宣言を發した。学生は約七百人が、新聞でそれを知り同窓の医師に講義を続けてもらった。そうこうするうちに日露戦争が数か月後に始まった。軍医が不足して専門学校令に合致しなくとも、私立医学校を認可した。日本医学校と、東京医学校に生まれ変わった済生学会は、合併して日本医科大学の前身になった。

東京医科大学は、一九一六（大正五）年にそこから分かれて現在に至る。（図、日本医科大学同窓会ホームページから）

## 五 まとめにかえて

入院中の医師・看護師・薬剤師等医療関係者の手厚い診療に感謝し、医療に役立てばの願いで家族は反対したが、日本医科大学に献体をした。しばらくはガンと共存してすごしたい。その間ぼーっとして生きてもいやだから、長年の夢の実現に努めたい。夢は「生産手段の社会化」で、差別や力ネ儲けのみが当然の風潮でない社会。その夢のため千葉真職員だった時こうむった差別は、後の人たちには味あわせたくない。

（よしだ ただよし・千葉県印西市）